



るもい風土資産カード

旧商家丸一本間家

明治時代の栄華を今に伝える
豪壮なたたずまい

道道増毛港線沿いで、ひと際豪壮なたたずまいを見せる「旧商家丸一本間家」。明治時代に「天塩国随一の豪商」と呼ばれた本間泰蔵（1849年－1927年）が、約20年の歳月をかけて築き上げた建物を修繕・復元したもので、平成15年（2003年）には国の重要文化財（建物）に指定されました。建物は切妻瓦葺きに軟石張り、下屋の大開口が印象的な呉服蔵を中心に居宅部、醸造蔵など5棟あり、広大な内部は平成12年（2000年）から一般に公開されています。

丸一本間家の歴史は、新潟県佐渡の仕立屋の三男に生まれた泰蔵が、増毛で雑貨店を開業した明治8年（1875年）から始まりました。明治13年（1880年）の大火で、一度は家財を失うものの、すぐさま立ち直り、呉服商、鯨漁の網元、海運業、酒造業など事業家としての才覚を発揮。建物も事業に伴って増築され、延べ床面積は1237.83㎡にも及びます。老朽化した文書蔵や木造属舎は撤去されていますが、初期建築が完成した明治35年頃の外観や内装は当時のまま維持され、この頃の再現を念頭に復元保存工事が行われました。

出入口から入って右手にある呉服蔵は本間家所蔵の花瓶や食器などの生活用品をガラスケースに収めた展示室で、左手の呉服店舗から奥には中庭をコの字に囲むように居宅部が続いています。明治時代の息吹を今に伝える呉服店舗には反物が並べられ、茶の間には宮大工が作製した神棚も残されています。3代一世紀にわたって守られてきた丸一本間家は、増毛町はもとより、我が国の歴史的建造物として、大切に保存されています。

見どころ

旧商家丸一本間家を象徴する一つが、美しく配列された屋根瓦。その一枚一枚には家紋が彫り込まれ、壁面や門柱には洋風の装飾が施されています。和風の伝統様式に洋風の技術や意匠を取り入れた建物は日本における洋風建築の歴史をたどる上でも重要とされています。

ポイント

居間として使われていた奥の間では、滋賀県出身の書家、巖谷一六（いわや・いちろく、1834年－1905年）が襖に揮毫（きごう）した漢詩を見ることができます。巖谷一六は明治の三筆の一人。美しく、迫力ある襖の墨書はしばし眺めていたい貴重な作品です。

五感で感じる！ 風土資産の魅力



約20年の歳月を掛けて建てられた豪壮な町屋様式の建物。床がぎしぎしと鳴る音を聴いてみてください。



重厚で美しい石造りの外観に使われているのは、増毛と浜益の海岸沿いにある日方泊産の軟石。淡い黄色みを帯びた軟石に触れると、当時の石工たちの思いが伝わってくることでしょ。



初期建築が完成した明治35年当時のまま維持されている内装からは、当時の生活臭が漂ってくるような感覚が味わえます。



丸一本間家が建つ道道増毛港線沿いの通称「ふるさと歴史通り」は、旧JR増毛駅を起点としており、木造3階建て元旅館「富田屋」、映画「駅 STATION」のロケ地となった「風待食堂」（現在は観光案内所）などが点在し、増毛町を代表する観光ガイドコースとなっています。

■基本情報 (R3.5)

文化財指定：重要文化財/北海道遺産（増毛の歴史的建造物群）
 指定年月日：平成15年12月25日/平成13年10月22日
 住 所：増毛郡増毛町弁天町1丁目27番地
 T E L：0164-53-1511
 開館期間：4月下旬～11月上旬
 開館時間：開館10:00～閉館17:00
 休 館 日：毎週木曜日（祝祭日は前日）7月・8月は無休
 入 館 料：大人400円（団体300円）
 高校生300円（団体200円）
 小・中学生200円（団体100円）
 ※団体は10名以上、就学前の幼児は無料